

砂粒

彼が空を見上げながら握った拳の間からは
さらさらと砂がこぼれ
風に乗って滑っていった

それは彼と私の放浪のはじまりだった
望むと望まないに関わらず、その瞬間
彼と私はその運命によって既に結ばれていた

その舵を取る者は、もはや彼だった
私は、赤い車を後ろから押すだけだった、そして
いつかはその役も下りねばなるまい

その時、私は追うものとなるだろうか
それとも捜す者となるだろうか
彼の後を、あるいは砂粒の後を

(1991.6.9)